艦魂異聞録　～青島に舞う水鳥～

流水郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
艦魂異聞禄　〜青島に舞う水鳥〜

【Nコード】
N3607G

【作者名】
流水郎

【あらすじ】
第一次大戦・青島の戦い。黎明期の日本軍航空部隊が初陣を飾ったこの戦場に、水上機母艦『若宮丸』の姿があった。飛行機はまだ、いつ墜ちるか分からない不完全な乗り物だった頃、それでも空に魅せられたパイロットと、それを見守る一人の少女の物語……

プロローグ

ライト兄弟が動力飛行に成功してから、凡そ十年後。

まだ飛行機が産声を上げて、間もない頃。

第一次大戦に参戦した日本は、同盟国イギリスの敵・ドイツに宣戦布告。

当時東アジアにおけるドイツ帝国の拠点であった、青島(チンタオ)市を攻略す

べく動き出した。

青島に駐留していたドイツ東洋艦隊は、海上封鎖を恐れてドイツ本国へ向かうが、フォークランド沖でイギリス軍の猛攻を受け、壊滅。

一方、青島に残った艦の一隻である水雷艇『S90』は、10月18日に日本海軍第2艦隊の防護巡洋艦『高千穂』を雷撃、撃沈する。日本の陸海軍は、湾内に残ったドイツ海軍の戦力を調査するため、草創期の航空部隊を派遣。

これが日本軍最初の航空作戦であると同時に、世界で初めて、『航空機を運用するための艦』が参加した戦いでもあった。

この僅か三十数年後に、人類は音の壁を破る。

そして現在、ライトフライヤーが飛んでから、百年以上の月日が流れた。

今こそ、知らなくてはならない。

いつ止まるか分からないエンジン。

あまりにも脆い、木と紙、布の機体。

飛ぶのも降りるのも、全てが賭け。

それでも飛んだ者達のことを。

勘違いしてはいけない。
百年以上経ったのではなく、その程度しか経っていないのだ……

プロローグ（後書き）

今回は、飛行機乗り視点の『鳥瞰編』、艦魂視点の『眺望編』に別れております。

一応戦闘シーンもありますが、この時代の空戦ってのは……いや、あれはあれで燃えます。

鳥瞰編

俺は今、人工の水鳥を“巣”に返す途中だ。
耳に聞こえてくるのは、後部で回転するエンジンの音と、風切り音だけ。
最も気を配らなければならないのは、やはりエンジン音だ。
今は小気味よい音を立ててプロペラを回転させ、推進力を生み出しているが、いつ不調を起こすかわからない。
そんな危ない乗り物に乗るのは、馬鹿のやることだと俺は断言できる。
そして、自分もその馬鹿の一人だ。

「そろそろです　！　」

後席から声がした。

「ああ」

“巣”に近づいてきた。
高度を下げてエンジンをカットし、ふわりと滑空に入る。
エンジン音が消え、機体は静かに、滑るようにして、“巣”の近くに着水した。
“巣”からは、クレーンが降りてくる。
先端のフックに、担当の乗組員がぶら下がっていた。

「お疲れさんです」

「おう」

機体にフックがかけられ、ワイヤが巻き上げられていく。
人工の水鳥と俺達は空中に吊され……
やがて、“巣”の上に戻った。

この艦の名は、『若宮丸』。
俺達の乗るモーリス・ファルマン水上機を運用するための、移動拠点。
本来ならば、水上機ではなく陸上機の離着陸が可能な艦が理想だが、英国のような強国ですら、まだ実現していない。
そんな中で、日本が代案として考えたのが、水上機を運用する艦だったわけだ。
水上機をクレーンで海面に降ろして発進させ、帰還時にはやはりクレーンにより回収するという、手間のかかる方式だ。
英国でも、同じような試みがされたと聞くが、詳しくは知らない。

空を飛んで巣に帰った後は、無性に一人になりたくなる。
余韻に浸りたいのだ。
報告を済ませ、俺は後部甲板で海を眺めていた。

……黒い瞳の若者が
　私の心をとりこにした

……もろ手を差し伸べ若者を
　私はやさしく胸に抱く

女の歌声が聞こえた。
振り返ると、ふわふわとした茶色の髪に、青い瞳の少女が唄いながら歩いていた。

普通ならば、ここは女とは無縁の場所だが、彼女は例外である。
彼女こそが、この船……『若宮丸』そのものなのだから。

……愛のささやきを告げながら
　やさしい言葉を私は待つ

俺は美麗な歌声を聞きながら、波の動きをぼんやりと目で追っていたが、彼女……若宮は俺の存在に気づいて、歌を止めた。
「続きを、唄ってくれ」
俺がそう言うと、照れくさそうに笑って、再び唄い始めた。

……みどりの牧場で踊ろうよ
　私の愛する黒い瞳

……私の秘めごと父さまに
　告げ口する人だれもいない

歌が終わると、若宮は俺の隣に歩み寄ってきた。
彼女は艦魂。船魂（ふなだま）などとも呼ばれる。
その名の通り、船に宿る魂。
彼女たちの姿が見え、声を聞くことが出来るのは、ほんの一握りの人間のみ。
「すみません、お邪魔をしてしまいました」
「いや、お前なら構わないさ。今のは、何ていう歌だ？」

「『黒い瞳』……ロシアの民謡です。第二戦隊の人たちが、よく唄っているので……」

第二艦隊の第二戦隊は、先の戦で鹵獲した艦で成り立っている。
それらの船に宿る者達も、元はロシアの生まれだ。
そしてこの『若宮丸』は、その戦の最中に拿捕された、英国の貨物船を改造した艦。
茶髪に青い目という彼女の風貌は、それに由来する。
昔は何処の国でも、女は金塊や骨董品と同じ扱いだった。
時には献上品として使われ、時には政治の道具となり、ただ時代に流されることしかできなかった。
船魂も同じだ。

「やはり、船魂も故郷は恋しいか」

俺の言葉に、若宮は少し目を細めた。

「……中尉、もしかして私たちを、哀れんでいるのですか？」

「哀れんでほしいか、若宮？」

「いいえ」

彼女……若宮はきっぱりと答えた。

「そういうのは、嫌いです」

「俺もだ」

俺は笑った。
若宮も笑った。
彼女もロシア生まれの船魂たちも、故郷を懐かしむことはあっても、今の自分の境遇を嘆いてばかりではない。
そこが自分たちの居場所だと覚悟を決め、生きる信念を持っている彼女たちに、哀れみなど失礼なだけだ。

「もっと何か、唄ってくれ」

「えっ……」

「嫌か？」

「いえ、中尉が聞いてくださるのなら……」

……若宮は照れながら、イギリスの民謡を歌い始めた。
それを聞きながら、俺はまた、波の動きを眺めるのだった。

…　…

翌日。
朝食の後、俺は甲板に出ていた。
今日も、飛ぶことになっている。

「あっ、中尉」

俺を見つけた若宮が、微笑みかける。

「おはようございます」

「ああ、おはよう」

俺は周りに誰もいないのを確認し、挨拶を返す。

「今日も、爆撃を行うのですか？」

「ああ」

俺達の任務は偵察だったが、やがてついでに爆弾を落としてこいと言われるようになった。砲弾を改造した即席爆弾で、威力は大したこと無いが、心理的な効果はあるのだろう。

「そう言えば、敵が新型機を出してきたって聞きましたけど……」

「ああ、日本にも民間に二機ばかりある奴だ。昨日も陸軍さんの航空隊が戦ったらしいが、全く歯が立たなかったそうだ」

「じゃあ、水上機だともっと不利ですね」

「そうだな。フロートがあるのはかなりのハンデだ」

普通だったら、女に話すには無粋な話題だ。

「空中戦になったら、どうします？」

「とりあえず、どうにかして爆弾を落とす。それが駄目なら、逃げる」

俺の答えに、若宮はくすりと笑った。

「どうした　？　」

「中尉は淡泊な人だなぁ、って」

若宮は言った。

「そうかね……おっ、そろそろ時間だ」

「はい、お気をつけて」

…………

……

エンジンの回転数が上がり、機体が水面を滑走する。
そしてふわりと、空中に浮き上がる。
二枚の翼が風を切り、大空へと飛び立つ。
速度も上がり、青島の港が見えてきた。

「爆弾投下用意　！　」
後席の少尉に呼びかけ、高度を下げていく。
相手の弾には気をつけなければ。
「中尉　！　」
少尉が叫んだ。
「二次方向に、敵機　！　」
言われた方向を見ると、確かに機影が見えた。
機首にプロペラがついていて、翼は一枚、鳩のような形をした飛行機。
ドイツ軍の『タウベ』だ。
特徴的な形状の翼を、ぐにゃりと曲げて旋回し、接近してくる。
「来ます　！　」
「やるしかないな」
タウベから、チカチカと光が見える。
拳銃を撃っているのだ。
俺はタウベの横に回り込むため、機体を旋回させる。
しかし相手は段違いの性能だった。
機体を四十五度以上傾けたかと思うと、俺の視界から逃れる。
少尉が拳銃を撃ち返すが、お互い三次元的に動き回いる飛行機だ。
滅多なことでは当たらないだろう。
無論、相手からの射撃も当たる可能性は少ないが、それでも安心して爆弾を落とせる状況ではない。

「中尉、右から来ます　！　」

「もう下へ行ったよ　！　」

俺は完全に翻弄されていた。
急降下していくタウベを追うが、奴はひらりと身を翻し、俺の後ろに回り込もうとする。
これでは埒が開かないし、燃料が無くなる。
こうなったら一か八か、奴を無視して爆弾を落としてみるしかない。

「くっ……南無三　！　」

敵戦艦に機首を向け、高度を下げる。
対空砲火も始まった。

「爆弾投下用意　！　」

叫んだその時、右側からエンジン音が急接近してきた。
いつの間にか俺の横に並んだタウベが、機体を数メートルほどの距離まで近づけてきたのだ。
俺は咄嗟に、操縦桿を左に倒した。
旋回して退避。

「……無理だ」

俺の口から、そんな言葉が出た。
機体性能だけではない、操縦士の腕にも差がある。

「中尉、そろそろ燃料が　！　」

「帰投する　！　」

任務失敗。
無様なことだ。
機首を『若宮丸』の方向へ向け、撤退する。
ちらりと後ろを振り返って見ると、タウベの操縦士が俺の方を見ていた。
その男が俺に向かって敬礼をしたのを見て、俺は自分が劣っているのは技量だけでないことに気づいた。
心の余裕でも、負けていたのだ。

……

……

帰還して報告を済ませた後、いつものように海を眺めた。
するといつのまにか、若宮が側に来ていた。
「空中戦をしたんですね」
「ああ、散々だったよ。性能も技量も、違いすぎる」
「大丈夫なのでしょうか　？　」
「戦況を考えれば、後は艦砲射撃と陸軍さんの歩兵部隊で、カタを

つけられるだろう。上の連中には、もっと航空部隊の実績を作っておきたい奴もいるだろうが」

若宮はそれを聞くと、少し俯いた。

「どうした？」

「私……最近、夢を見るんです」

「夢？」

「はい」

若宮は頷いた。

「自分の船体が、滑走路のような船になっていて、そこから沢山の飛行機が飛び立って行くんです。そして、敵の飛行機と戦って、敵も味方も次々に墜ちて……それがとても怖くて、とても綺麗で……」

「……」

その夢は、いつか現実となるかもしれない。

戦艦の船魂たちは、『若宮丸』のような航空機搭載艦の力を疑問視している。

いや、他にも疑問視する者は大勢いるだろう。

しかし空からの攻撃に対する恐怖は、相当なものだ。

今回の戦いで航空部隊の有用性が証明されれば、航空機は今より更に発達し、俺など及ばないような操縦士も生まれるだろう。

そしてやがては、航空機とそれを運用する艦が、戦の主役となる…

…。

無論、それを若宮は喜ばないだろうし、俺も喜ぶ理由は無い。

「私、空が怖いです」

「俺もだ」

「でも人間は、そんな空も支配しようとしている……人間も怖い」

「ああ、そうだな」

俺は頷く。

「だから俺は、飛びたいんだ。操縦桿を握っている間は、そんなことは気にならなくなる」

「飛ぶのって、そんなに凄いんですか？」

「凄いさ」

国がどうの、作戦がどうの……そんなことは関係ない。
飛びたいから、飛ぶ。
ただ、それだけだ。

「……私も中尉と一緒に、飛べたらいいのに」

「俺も、お前を乗せてやれたらと思うよ」

船魂は、船から離れられない。
そして、船と命を共にする。

そんな船魂だからこそ、空には特別な何かを感じるのかも知れない。
「蒼い海原で踊ろうよ、俺の愛する青い瞳……なんてな」
「……日本人もそういう冗談が言えるんですね」
頬を赤らめ、若宮は笑った。
「だがお前にはここで、俺の帰りを待っていて欲しい、って気持ちもある」
「……私も一番嬉しいのは、飛び立った飛行機が……貴方が帰ってきたときです」
……この美しい生き物は、俺が考えているよりも情熱的なのかもしれないな、などと思った。
「だから、何だ、これからも宜しく頼む」
「はい、中尉」

俺の側で、若宮は唄う。
俺はじっとそれを聞きながら、波と空を眺めた。
このまま時間が止まってもいいな、と、俺は考えていた。

…

鳥瞰編（後書き）

モーリス・ファルマン小型水上機
日本軍がフランスから輸入した機体。
これより新しいモーリス・ファルマン大型水上機と共に『若宮丸』に搭載され、青島攻略戦に参加した。
陸軍機と共に、湾内の残存戦力調査という任務を果たし、それに加え即席爆弾による爆撃も行った。
エンジンは推進式。

エトリッヒ・タウベ
ドイツ、オーストリアなどで作られた航空機。
『タウベ』とは鳩のことで、その名の通り鳥のような形状をしているが、実際にはザノニア・マクロカルバという植物の種子の形状がモデルである。
抜群の安定性を持つ一方で運動性能は悪かったため、１９１５年夏には前線から退いたが、それまで各国の軍で使用された。
青島のドイツ軍機の中で、実戦に参加したタウベはたった一機だったが、当時最新鋭のその性能で日本軍機を翻弄した。
日本も民間から一機を徴用し、ニューポール機と共に青島へ派遣するが、実戦に参加する前に日本軍は勝利した。

流水郎「読んでくださってありがとうございます。今回は政治とか

そういうのをあまり出さずに、ただひたすら空に魅せられたた男と、それを見守る艦魂を書きました。イメージ的にはスカイ・クロラの影響もあるかも」
小夜「本当に黎明期の航空隊は、大変だったよね」
流水郎「タウベに翻弄されたとはいえ、偵察任務はきちんと果たし、日本軍最初の航空作戦は、陸軍・海軍共に成功だったと言えるだろう」
絹海「この頃の飛行機、機銃は無かったんですか　？　」
流水郎「うん、最初飛行機は偵察用にのみ使われていて、敵機にあっても互いに敬礼したり、手を振ったりするだけだったらしい」
絹海「そ、そんなに呑気でいいんですか　？　」
流水郎「本文に書いたとおり、この頃の飛行機はいつエンジン不調で落っこちるかわからない不完全な乗り物だった。そんな死と隣り合わせの世界に生きる者としてのプライドから、「俺達はみんな、空に命を賭けるパイロットだ、仲間だ　！　」みたいな、敵味方を超えた共通の意識があったらしい」
小夜「ちょっと羨ましいなー」
流水郎「ところが飛行機による偵察が発達するにつれて、敵機を落とす必要性が生まれてきた。最初は、たまたま持っていた工具か何かを投げつけたのが始まりだったらしいが、こうなるともう後戻りはできない。石ころやレンガを愛機に積んで投げつけたり、当時は吹きさらしの操縦席だったから目つぶし玉とかも使ったらしいな。やがて護身用の拳銃で撃ち合ったり、騎兵銃を持ち込む者も現れたそうだ」
小夜「互いに動き回ってるし、空戦技術も発達してなかったから、滅多なことじゃ命中しなかったけどね。で、やがて固定機銃を装備した『戦闘機』が開発されて、本格的な空中戦の時代が始まるわけ」
絹海「なるほど……。ところで敵の『タウベ』っていう飛行機が旋回するとき、「翼をぐにゃりと曲げて」っていう文がありましたけど、この頃はエルロンが無かったんですか　？　」

流水郎「タウベの翼は『たわみ翼』と言って、主翼自体をねじ曲げて機体を傾ける方式だったんだ。本物の鳥に近い方式だね。すぐにエルロンが開発されたからあんまり使われなかったらしいけど、これはライト兄弟がたわみ翼の特許を握ってたことも大きいみたいだ」
小夜「その辺のことで、ライト兄弟は何度も裁判起こしたらしいよ」
流水郎「詳しいことはググってください」

小夜「ところで前に、「日本軍最初の航空母艦の話」って言ってたよね？」
流水郎「うん」
小夜「『若宮』って、水上機母艦じゃないの？」
流水郎「1920年、鳳翔が就役するよりも前に『若宮』は航空母艦に籍を置いている。航空母艦と水上機母艦が区別されるようになったのは、陸上機の離着艦ができる本格的な「空母」ができてからなんだ。だから、実質を無視して当時の名称にこだわれば、『若宮』は「日本で最初に航空母艦に分類された艦」なわけ」
絹海「……まあそうですね」
流水郎「さて、次は『若宮』視点になります」

眺望編

私の甲板から、沢山の飛行機が飛び立っていく。
金属製の機体が煌めいて、蒼い空を舞う。
刹那、機関銃の音。
何処からともなく現れた、別の飛行機の群。
私から飛び立った飛行機達は、そいつらと戦い始める。

一つ、空中に散華してオレンジ色の花を咲かせ、また一つ、海に墜ちて黒煙を上げる。
海面には墜ちた飛行機の、油の輪が浮かび上がる。
なんて綺麗で、なんて恐ろしい景色なのかしら。
綺麗なラインを描いて、飛行機乗り達が戦う。

その時、雲の間をすり抜け、一機の飛行機が私に向かって、一直線に降りてくる。
飛行機はそのまま速度を上げ、私の甲板に――――

……

……………

………

「ん……」

私は目を覚ました。
改造されてから、しょっちゅうあの夢を見る。
最後は決まって、あの飛行機が私の船体に突っ込んで、目が覚める。
空を見上げると、少し前に飛び立った水上機が帰ってきた。
多分、“中尉”だ。
エンジン音が止まり、水面に降り立つ。

私の名は『若宮丸』。
「丸」というのは、日本において船につける名称だけど、男性を表す言葉でもあるらしく、私自身は普段、若宮と呼ばれている。
元々はイギリスの生まれで、『レキシントン』という名の貨物船だった。
日露戦争の最中に拿捕されて以来、日本軍の運送艦として働いていたけど、今では水上機を戦地まで運ぶのが仕事。
あの夢みたいに、私自身が戦場に立つことは無い。

飛び立った水上機が無事に帰ってきて、乗員の回収が済むと、ホッとする。
それから、気分が良くなって、自然と歌を口ずさんでしまう。
他の船魂たちは、私は歌が上手いと言うけど、あまり自覚は無い。
私から見れば、船魂はみんな声が綺麗だと思うけど。

「黒い瞳の　若者が　～♪」

歌いながら、船尾へ向かって気ままに歩く。
三番辺りまで唄ったとき、船尾で海を眺める人がいるのに気づいて、声が引っ込んだ。
“中尉”だ。
モーリス・ファルマン水上機操縦士の一人で、私たち船魂の姿が見える人間。
“中尉”は、私の方をチラリと見た。
黒い瞳が私を見つめ、再び海に視線を戻した。

「続きを、唄ってくれ」

海を見たまま、“中尉”は言った。
少し恥ずかしかったが、言われたとおりに先を唄う。

「緑の　牧場で　踊ろうよ～　私の　愛する　黒い瞳　♪」

ロシアの歌、「黒い瞳」。
日露の戦いで鹵獲された、ロシアの船魂たちが唄っているのを聞いて、覚えた。
テンポはやや暗いけど、内容は甘い恋の歌で、私は好きだ。
青い目の多い国の人間は、黒い瞳に魅力を感じることが多い。
私も、最初に黒い瞳を見たときにはドキリとした。
その中でも“中尉”の瞳からは、何か特別な物を感じる。
“中尉”は空から帰ってくると、いつもここで海を眺めている。
それが、この人にとって一番大事な時間らしい。

「すみません、お邪魔をしてしまいました」

「いや、お前なら構わないさ。今のは、何ていう歌だ　？　」

「『黒い瞳』……ロシアの民謡です。第二戦隊の人たちが、よく唄っているので……」

「やはり、船魂も故郷は恋しいか」

“中尉”がそう言ったので、私の心に疑問が浮かんだ。

「……中尉、もしかして私たちを、哀れんでいるのですか　？　」

すると彼は、青白い顔に微かに笑みを浮かべた。

「哀れんでほしいか、若宮　？　」

「いいえ。そういうのは、嫌いです」

「俺もだ」

“中尉”は珍しく、歯を見せて笑った。
私も笑った。
この人は結構、私たちのことを分かっている。

「もっと何か、唄ってくれ」

「えっ……」

「嫌か　？　」

嫌どころか、少し嬉しい。
ただ、凄く照れくさいけど。

「いえ、中尉が聞いてくださるのなら……」

……私は、日本は好きじゃないし、祖国は懐かしい。
けれど、今の自分の境遇を、嘆いてばかりはいられない。
私たちは、船の守り神なのだから……そのプライドが、そうなることを許しはしない。

………

その翌日も、“中尉”は飛び立つ。
ファルマン機が海面に下ろされていくのを眺めていたとき、誰かが私の肩を叩いた。

「遊びに来たよ、若宮」

「あっ、松江さん」

ロシアのスカーフを纏った、短髪の女性。
私と同じ、第二艦隊の付属艦『松江』の船魂だ。

「今日も、偵察任務？」

「はい、爆弾も投下するそうです」

「砲弾を改造した奴でしょ。そんな物落とすだけで、敵艦を沈めら

れるの？」

「無理でしょうね。けど、精神的な恐怖を与えることはできます」

そう言うと、松江さんは納得したようだ。

「なるほど、確かに空からそんなものが降ってきたら怖いわ」

その時、エンジン音が鳴り響き、ファルマン機が水面を滑走した。そして、飛び立つ。

「おー、飛んだ飛んだ。若宮の飛行隊のおかげで、私たちも青島湾内の戦力を知ることが出来たし、みんな助かってる。高千穂さんの仇を討てるって、はしゃいでる奴もいるわよ」

ドイツ軍の雷撃で沈められた防護巡洋艦、『高千穂』。鹵獲された艦の多い第二艦隊だけど、彼女は日本製の艦だった。物静かな人で、他国出身の船魂にも優しくしてくれた。

「……高千穂さんの死は、みんなが悲しんだし、みんなドイツを憎んでいた。けど、私たちが敵艦を沈めれば、ドイツの船魂たちは、同じように私たちを怨むでしょう」

「……ええ」

「結局、何か意味があるようには思えませんね」

「……なんだか最近、冷めてるわね。何かあったの？」

松江さんは、心配そうに私の顔をのぞき込む。

どうも“中尉”の前と、他の船魂の前では、態度が変わってしまう。

「悪い夢を、見るんです」

「どんな夢　？　」

「航空機の母艦が発達した夢なんですけど、それで敵の飛行機も味方の飛行機も、どんどん死んでいくんです。なんか、私が造られたせいで、戦争に拍車がかかっちゃうんじゃないかな、って……」

「……うーん」

松江さんは腕を組んだ。

「そういうことも、もしかしたらあるかもね。でもさ、若宮が悩むようなことじゃないよ。いや、そういうこと考えるのは大切なことだけどさ、若宮は艦魂の役目を果たしなよ」

「役目、ですか……」

「うん、大切な人がいるんでしょ　？　だったらその人を見守りながら、前向いて生きていけばいいじゃん。沈むか解体されるとき、自分は背筋伸ばして生きたぞって言えれば、それでいいんじゃないかな　？　」

彼女は、結構良いことを言う。

船魂の在り方を分かっているというか、そんな気がする。

「そう、ですよね」

「そうだよ、背筋のばしなよ」

……その後は“中尉”が帰ってくるまで、松江さんと話し込んでいた。
ロシアの意匠に花が多いのは何故かとか、イギリス人は何でこんなに紅茶が好きなのか、とか……
他愛もない話題だけど、楽しい。
いつ別れるか分からない仲間との、大切な時間だから……
“中尉”は帰還後、いつものように船尾で、波を眺めていた。

「空中戦をしたんですね」

「ああ、散々だったよ。性能も技量も、違いすぎる」

「大丈夫なのでしょうか？」

「戦況を考えれば、後は艦砲射撃と陸軍さんの歩兵部隊で、カタをつけられるだろう。上の連中には、もっと航空部隊の実績を作っておきたい奴もいるだろうが」

実績……
私のような艦を、もっと造るためだろうか。

「……どうした？」

私が自然と下を向いてしまったので、“中尉”は尋ねてきた。
松江さんに言われて吹っ切れたと思ったけど……やっぱり、“中尉”の考えも聞いてみたい。

「私……最近、夢を見るんです」

「夢　？　」

「はい。……自分の船体が、滑走路のような船になっていて、そこから沢山の飛行機が飛び立って行くんです。そして、敵の飛行機と戦って、敵も味方も次々に墜ちて……それがとても怖くて、とても綺麗で……」

“中尉”は無表情で、私の話を聞いていた。

「私、空が怖いです」

「俺もだ」

「でも人間は、そんな空も支配しようとしている……人間も怖い」

「ああ、そうだな」

「だから俺は、飛びたいんだ。操縦桿を握っている間は、そんなことは気にならなくなる」

“中尉”は頷いた。
やっぱりこの人も、怖いんだ……

「飛ぶのって、そんなに凄いんですか　？　」

「凄いさ」

……私には、中尉の気持ちは分からない。
私自身は、空を飛ぶことなど出来ない。
飛べる中尉は、本当の怖さを知っているし、「凄さ」も知っているんだろう。
それに……
空を語るときの“中尉”の目は、輝いている。
戦争とか国とかよりも、ただ空を愛しているんだ。

「……私も中尉と一緒に、飛べたらいいのに」

自然と、そんな言葉が漏れていた。

「俺も、お前を乗せてやれたらと思うよ。……蒼い海原で踊ろうよ、俺の愛する青い瞳……なんてな」

“中尉”はふと思いついたように、そんなことを言った。

「……日本人もそういう冗談が言えるんですね」

私は笑うことで、照れくささを紛らわせた。
どうもこの人は、東洋の価値観と共に、西洋的な「洒落っ気」も持っている気がする。

「だがお前にはここで、俺の帰りを待っていて欲しい、って気持ちもある」

……ああ、そうか。
それが私の役目なんだ。

「……私も一番嬉しいのは、飛び立った飛行機が……貴方が帰って

きたときです」
“中尉”は鼻の頭を掻いた。
本人は無意識かもしれないけど、もしかしたら照れているのかも。
「だから、何だ、これからも宜しく頼む」
「はい、中尉」

なんだか、完全に吹っ切れた。
松江さんが言ったように、背筋伸ばして生きて行けそうだ。
中尉の隣で、私は自然に歌い始めていた。

今後、この蒼い世界で、多くの命が散っていくだろう。
でも私は、自分の運命からは逃げない。
私は船魂なのだから。

…

眺望編（後書き）

『若宮丸』
世界で初めて実戦に参加した、水上機母艦。
元はイギリスの貨物船『レキシントン』である。
青島攻略に参加し、日本海軍初めての航空作戦を行った。
第一号だけに水上機母艦としての性能は低かったが、航空機を運用する艦の有用性を証明した実験艦としては、成功を収めたと言える。
艦魂
長い茶髪に、青い目の少女。
本人はあまり自覚は無いが、美声の持ち主。
やや冷めているものの、“中尉”に対しては多少情熱を見せる。

『松江』
第二艦隊付属艦。
元は日露戦争初期の戦闘で自沈し、日本軍に引き上げられたロシアの汽船『スンガリ』。
スンガリとは中国東北部を流れる河の名で、同じ河の日本名である『松花江』から『松江』と命名された。
艦魂
ショートカットで、割と社交的。
日本という国を割と気に入っているが、その一方で祖国ロシアの行く末を案じ、祖国を忘れないためにスカーフを纏っている。

流水郎「最初は“中尉”視点の話だけを計画していたのですが、若宮の影が若干薄いのと、ボリュームの問題から若宮視点とのセット

にしました」
絹海「あくまでも、実験艦的な存在だったんですね」
流水郎「まだ航空機が海戦の主役になるとは、予想されていなかっただろうからな。でもこの数十年後には、ジェットだ！　音速だ！　ミサイルだ！　……っていう時代がくるわけだけど」
小夜「そう言えば、平成の日本には空母は無いんだよね？」
流水郎「ああ。回転翼機を運用するための、ＤＤＨっていう護衛艦は開発されてるけどな。今の日本が空母を持つのは、政治的事情よりも物理的事情で不可能なんだよ」
絹海「そうなんですか？」
流水郎「二等海士長先生から聞いた話じゃ、海上自衛隊は殆どの艦が乗員の充足率８０％以下ってくらい、人手不足だそうだ」
絹海「なるほど、空母を動かすには数千人は必要ですからね。それに戦略的には、複数保有してないと意味無いですし……。作者さんは平成の日本に、空母は必要だと思いますか？」
流水郎「いらんわ」
絹海「……言い切りますか」
流水郎「造ったところで、中国と張り合う前にアメリカのパシリに使われるのがオチさ。税金の無駄遣いだよ」
小夜「あらら」
流水郎「国防は確かに大事だし、アメリカに守ってもらえばいいと思ってる連中はぶん殴ってやりたい。けど農学を志す者として本音を言わせてもらうと、空母をどうのこうのとか言う前に、食糧問題に関心を持って欲しいんだ。日本の食糧自給率は現在４０％で、残り６０％は外国に依存している。日本の農民は苦しんでるんだよ。後継者不足は多少改善の兆しもあるが、それでも大変なんだ。空母を造ったり、馬鹿高い戦闘機（Ｆ－２２）を買ったりする金があるなら、農業と食料の問題を解決することに使って欲しい。金の力で何でも出来るわけじゃないけどさ」

流水郎「それに俺、正直に言うと中国好きなんだ。無論、政治じゃなくて文化の意味で。中国製食品への毒物混入とか見てると、悲しくなる。俺は同じアジアの農耕民族として、彼らを助けたいんだ。日本人にも中国人にも、農業は人の命を守っているということを想い出させたい。平和ボケした典型的な日本人の戯れ言と思われるかも知れないけど、平和ボケって言葉はスカイ・クロラを読んでから使って欲しいなー、と」

流水郎「さて、次回は東郷平八郎が登場する……かもしれない」
絹海「なんの船の話なんですか？」
流水郎「内緒」
小夜「それでは、次回もお楽しみに！」
流水郎「あ、ちなみに艦魂抜きの戦記を書く可能性も高いので。実を言うと俺が得意なのは海戦じゃなくて、空中戦か剣戟なもんだから……」

ちょっくらスカイ・クロラについて語らせていただきます。
読み飛ばしても結構です（爆）

レシプロ機が発明されたときから、その性能に限界があることは分かっていました。
その解決策の一つとして考えられたのが、『震電』のような推進式戦闘機です。
ライトフライヤーや、この話に出てきたモーリス・ファルマン水上機も同様の推進式ですが、それを更に洗練された設計の機体に使うことで、牽引式を上回る空戦能力を生み出すはずでした（空気抵抗が減る、安定性を犠牲にすることで機動力が向上する、など）。
しかし実際には、ジェット戦闘機の発達という革命が起こり、震電

のような戦闘機は幻に終わりました。
スカイ・クロラでは「五十年前の戦争のとき、ヨーロッパでジェット機の研究はされていたが、実用に耐えうる物はできなかった」という記述があり、代わりに推進式の戦闘機が発達しています。
実際、主人公たちの乗る『散香』は震電をモデルにしたと思われるデザインです。

空戦シーンも素晴らしいですが、「平和ボケ」という言葉について結構考えさせられるストーリィです。
平和のありがたみを一般人に認識させるため、企業の手によって日夜『ショーとしての戦争』が行われています。
ショーと言っても、普通に人は死にます。
平和って何だ？　平和ボケってどういう意味だ？
そんなことを考えさせられる物語です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3607g/

艦魂異聞禄　～青島に舞う水鳥～

2010年10月9日21時31分発行